

婦人雑誌にみる近代日本の女性たち

一九二〇年代の婦人文化状況試論

笹本真寿美（一九八五年度卒・大江ゼミ）

目次

- はじめに
- 1、中間層の台頭と婦人雑誌
 - 2、実用派ジャーナリズムの隆盛
 - 3、実話記事と社会への回路
 - 4、一九二〇年代末期の婦人雑誌
- むすび

はじめに

晩年まで婦人運動に活躍した平塚らいてうは、『青踏』が発刊された明治四十四年ごろの日本の状況を、次のように回顧している。

「こうした輸入思想、輸入文芸の影響で、自然主義文学運動は頂点を迎え、一方では自我尊重、徹底個人主義の白樺派文学の抬頭など、新しい文学運動が若い人のなかから起こる一方では、大逆事件をきっかけとして、思想弾圧の暗いあらしが吹き荒れ、

自由思想の『冬の時代』といわれた時期でありました。

こうした時代の波のなかで、一番保守的であったのは、おそらく教育界と婦人界であったでしょう。」

まさに時代のふきだまりにあったのが、婦人問題である。それが、次の大正期においてはどのように変化していくのであろうか。

大正デモクラシー期といわれる一九一〇年代から一九二〇年代は、単に政治的運動ばかりでなく、広く思想や文化全般にわたる民衆の権利や抑圧からの解放が叫ばれ、その一環として、婦人解放論が輩出してジャーナリズムをにぎわしていた。新聞は婦人欄・家庭欄を設置して充実に努めた。雑誌は婦人向け雑誌が確立し、なかには発行部数が数十万に達する雑誌もあった。婦人雑誌はすでに明治期から発刊されていたが、「女性を主たる受け手層として定期的に制作・販売されるメディア」である現在の女性ジャーナリズムの原型が形成されたのは、この時期である。

そこで、ここでは、女性、特に主婦層を対象にした女性雑誌ジャーナリズムを通して、近代日本の婦人文化について論じてみようと思う。

考えてみると、長いあいだ主婦は歴史学の認識対象として、視野に入っていなかったのではないだろうか。鹿野正直氏によれば近代日本の女性史研究は、次の二つの大道からなっているという。一つは、主として知識女性ないし中間層女性を対象として自我の追求を設定する道であり、いま一つは、主として労働女性を対象として階級解放へのたたかいを設定する道である。こうした研究の中でも、主婦という視点からの考察はあまりなされていない。先に触れたように、発行部数が数十万に達する婦人雑誌の発展

は、読者層を主婦層にしぼったことによるものである。そこには、それ程の大量な出版を必要とした女たちの生活があった。市井の女たちと婦人雑誌のつながりを、日常生活のレベルから考察することで近代日本における女性の姿と、女性史とともに歩む婦人雑誌の位置づけをしたい。

1 中間層の台頭と婦人雑誌

一九一〇年代は出版界が活気に満ち、それは婦人雑誌にも及んでいた。一九一〇年以前の主な婦人雑誌には、『婦人画報』（一九〇五年創刊）『婦人之友』（一九〇八年、一九〇三年創刊の『家庭之友』を改題）『婦人世界』（一九〇六年創刊）の三誌があった。

一九一〇年代に入ると、『婦人界』（一九一〇年創刊）を皮切りとして多数が創刊され、大正期には三〇種にものぼった。とりわけ編集意図を「あくまでも自由主義の立場にたつて、女権拡張を目的」に置く社会派の総合雑誌『婦人公論』（一九一六年創刊）と、家庭婦人を対象とした実用派雑誌『婦人之友』『主婦之友』（一九一七年創刊）『婦人倶楽部』（一九二〇年創刊）などが、婦人雑誌の二大潮流となり、多数の読者を得て地位を固めていった。一九二五年に『キング』（講談社）が登場するまでの時期二〇年近くは、『婦人雑誌』が『婦人雑誌』のベストセラーの第一位を守りつづけた⁽⁵⁾のであった。

ここで、家計簿記事の新聞・雑誌代を、大正六年の『主婦之友』からひろってみよう。

「八十三銭の支出の」修養費とは、新聞と雑誌代とで主人の分と私と子供との三種であります。」（埼玉、小官吏、月収三十

四円）

「新聞雑誌の一元は主人の雑誌一種、私の分（主婦之友）一種、子供の分一種、合せて三種と新聞が一種であります。」（静岡、教員、月収五十円）

「（昨年度の新聞雑誌費八円）新聞や雑誌は毎月一種づつ読むことに致しております。」（茨城、農商、年収五九〇円）

「（三元の）修養費中には新聞雑誌と、お筆の月謝及び主人が時々新刊書を求める費用にあてます。」（滋賀、中等教員、月収五十五円）

また、大正十四年の『婦人世界』から「月収七十円前後の家計予算発表（選評）嘉悦孝子」（十一月号）「月収七十円前後の家計予算第二回発表」（十二月号）とみると、

「修養娯楽費四円、主人、新聞雑誌書籍二元五十銭、主婦、雑誌子供用品一元五十銭」（愛知県、小官吏、月収七三元）

「修養費三元、新聞一種、雑誌三種」（千葉、軍人、月収六三元）

「図書費四円五〇銭、内訳は新聞代、雑誌代（主人物二、主婦物一、小供物二）、図書代」（島根県、小学教師、月収七十円）

「（新聞雑誌代二元三十銭）東京新聞一部に婦人世界（甲府郵便局員、月収六十八円）などが見られる。

これら二誌の実例には、年度の差、地域差、家族数の違いなどを考慮しなければならないが、大正六年ごろは年収五〇〇円前後、大正十四年の場合は年収八〇〇円前後の中間層においては、修養費として婦人雑誌の一種は、主婦が購読できる経済的余裕があった、と考えられる。とはいえ、これが豊かな暮らしぶりとはいえない

ず、『婦人世界』での島根の主婦（小学教師）は、

「修養費、読書は教師の生命だという主人の要求額には未だ未だですが、之れ以上支出の出来ないのは遺憾に存じています。」と、やりくりの苦勞を述べている。また、精神修養のための対応として、

「新聞は知人が送ってくれますので代金はいりません。それもこれも皆な私達が読み終りましたら、田舎の妹や友達に送って喜ばします。」（『主婦之友』東京、役人）

「社員同士が書籍を交換して読んで居りますから、読書費が割方少なくてすみます。」（『婦人世界』山口、会社員）
などのような例もある。

ともあれ、婦人雑誌は、第一次世界大戦による好景気で大正六年～七年に急増した新中間層（サラリーマン、技術者、自由業者）の家庭にくい込むことで、発行部数を伸ばしていった。大正六年の『主婦之友』にみられる「中流家計いろいろ」や「中流新家庭の暮し向」という特集記事も、当時の中間層の増加現象を示している。

次に、婦人雑誌の読者の拡大に関連して、女子教育について触れておきたい。

大正期、高等女学校の設置・生徒数の増加は目ざましく、後期には、都市における女子の高等女学校への進学は、少なくとも中産階級においては一般化しつつあった。しかしながら、男子が知的教科に多くの配当時間を割いているのに対し、女子は家事・裁縫・手芸などの実用的教科が中心である。高等女学校とは名ばかりで、内容的には男子の中学校とは相当な隔りがあり、常に修身

的・しつけ的であった。

男子にくらべ著しく不均等なこの女子教育の方針は、日本の近代国家とともに新しく形成・確立した良妻賢母主義による。これは、「家庭内での規範を国家的規模に拡大し、性差を本性の相違にすりかえて、上下関係をあいまいにし、体制イデオロギーとしての正統性を獲得」した教育体制であった。それと同時に、資本主義の発展に伴い、資本側の期待も性分業意識を定着させ、「安価で従順な労働力を引き出す」ことであった。

大正期は、新しい時代に即応した女子教育政策の改良がなかったわけではないが、女子教育の理念がより広く国家政策的規模をもって徹底したにすぎず、「家維持の為の節儉・貯蓄であり、家事技術の重視であり、衛生思想の養成」という内容であった。

このような矛盾のある女子教育ではあったが、知的能力や向学心が向上し、職業進出を果す女性も増えていた。一九一九年を例にとれば、「女教員、公務員・事務員・女店員・電話交換手・記者・速記者・タイピストなどを合計しても四三万人で、三五八万人を越える有業婦人の八%にすぎないのだが、人々はそこに女の社会進出と時代の変化を認めたのであった。⁽¹⁰⁾職業婦人の登壇は、数は少ないながらも新しい職種への進出速度が、社会的関心を一層ひき上げたのである。

大正デモクラシーのなかで成長した女性たちには、職業婦人となり社会進出を果す人、また不均等な女子教育に対して女子学生運動をおこす人もいた。大正期のいわゆる新しい女を生み出した基盤は、中等教育の機会にめぐまれた中間層あるいはそれ以上の層の女性たちであった。主婦となった女性たちは、良妻賢母主

義が基調となる夫と妻のあり方への疑問などから、従来とは異なる主婦像を模索し始めていた。旧態的な婦徳中心ではない女性向け雑誌が求められ始めた。

2 実用派ジャーナリズムの隆盛

女性の社会進出と社会的関心の高まり、女性自身からの家庭生活への疑問など、婦人雑誌の新しいジャーナリズムの潮流を起す素地は十分に整えられた。この潮流には、女性たちの生活意識を反映して二つの流派が形成される。ここでは二流派を、一つは社会派ジャーナリズム、いまひとつは実用派ジャーナリズムと呼ぼう。『婦人公論』を代表する社会派ジャーナリズムがまず女権拡張を使命としたのは、当時の社会状況からいえば当然であった。近代日本の女性は、「良妻賢母が家秩序」を、また「娼婦が社会秩序」を維持するという、西洋文明秩序に依拠した家父長的秩序を支える役割を果たすことになっていたのである。社会派ジャーナリズムは、こうした日本の社会・醇風美俗とされてきた男性本位の社会一に対する挑戦でもあった。

社会派ジャーナリズムとは反対に、糖みそくさい家庭実用記事を誌上に盛り込んだのが、『主婦之友』を代表する実用派ジャーナリズムであった。女子教育の普及はあったものの、義務教育の小学校で終わる女性が、人数の上からもまだ大部分であった。本来ならば修了以後は、文字や活字にはあまり親しむことはなく、学力・知識も深める機会が少なかったであろう。そうした人々は、娯楽としての雑誌を通して、文字に親しみ知識を得ていくことで、また、雑誌文化のなかへ引き入れられていった。

家庭向けの実用雑誌を志し、『主婦之友』を創刊した石川武美はいう。「そのころ、婦人雑誌や家庭雑誌の発行所は、出版界一流どころばかりであった。一中略—こういう堂々とした相手方にくらべて、日本一をめざすこちらのなんと貧弱なことであろう」と。

当時の婦人雑誌界は、東京社（のちの婦人画報社）の『婦人画報』、実業—日本社の『婦人世界』、博文館の『女学世界』（一九〇一年創刊）が争覇戦を展開し、前年には『婦人公論』が創刊された。だから当時の出版界では、この乱立をみて「損をしたくないなら婦人雑誌を出せ」といわれたという。そうした状況のなか、石川が出版の意図としたところは、娘時代よりもはるかに長く、卒業のない主婦の時代となれば、最も身近なものとして『主婦之友』の購読を続けるだろうということであった。石川は、家計をやりくりする中間層家庭を焦点としたが、家事技術、家庭管理の実用記事が必要とされるとする判断には、産業化に伴う都市生活の変化があった。

全国一万人以上の都市の人口は、総人口に対して一九一三年には二二・七%、一九一八年に二七・三%、一九二五年には三二・四%となった。都市人口の膨張は交通機関の発達とともに、第三次産業、つまり流通部門が大きくなってきたことを示すものである。新しい都市生活のパターンがつくられつつあった。家庭と経営が分離して家庭がいわゆる消費を中心とした生活になると、家庭は女の仕事となる。ここでは、妻は家にあつて消費部門を担当する夫婦分業の形態が生まれた。主婦は、子育てと家庭管理と家事作業に専念するようになる。また、「母性」が強調されるのも

この時期である。沢山美果子氏によれば、この時期、母性とは、母親という一つの属性を「母性」という形で女性全体をおおうものに拡大し、母親としてのあり方以外を否定したところに成立しているという⁽¹⁶⁾。育児期間は長い年月であり、母性は特に日本の社会において、女性の自立を長く抑圧していくことになる。さらに、「妻」「母」「姉妹」「娘」の「いづれの地位・役割の場合も、『他人に尽す』ことが、自己放棄が当然とされたのである。つまりそれは、個としてのアイデンティティをもたない存在としての女性を、強調したものである。」

ここにさらに「嫁」という用語を加えれば、近代日本の理想の女性像である「良妻賢母」は、こうした「他人に尽す」女性像に範型を求められるだろう。

「ロロンプスの卵」ともいわれる家計簿は、『婦人之友』を創刊して都市生活者に近代的合理的な生活設計とその実践を教えようとした、羽仁もと子の創案であった。家計簿の位置付けは、多くの女性が生涯かかわり続けるか、あるいは少なくとも一時期通過するという点で、女性特に主婦問題を考える上で見逃せない重要な装置である。

この『婦人之友』が創案した家計簿をとり込み、支出を記帳・集計して予算計画を立てるといふ家庭経営^{II}やりくり方法を都市俸給生活者層に広めたのが、実用派ジャーナリズムである。いかに経済的な生計を立てるかにについての指針として、『主婦之友』の大正六年十二月号は、季節が冬であることから「燃料の経済的研究」と題し、

薪の経済的買い方と使用法

家庭向にはどんな炭が良いか
瓦斯はどんな使い方が経済か
電気を燃料として使う便利

と、具体的に講じている。同時に、収入を得る方法として内職・副業の紹介もしている。『主婦之友』同号では、「妻の働⁽¹⁷⁾で収入を殖した経験」という読者の投稿記事がある。

資本いららずに五年間に八百円を儲く……ぎん子
内職から得た金の尊さと心の喜び……むめ子
三人の子供を片手に編物内職する……はつえ

また、『婦人世界』大正十四年十二月号での家計簿記事にも、収入の部に「主婦内職」の記載がみられる。

「収入の部（七十二円）では私が裁縫の内職を致しますので月に平均しますと三円五十銭程になります」（米沢、運子）

この例での内職収入分三円五十銭は、記載されている支出の部において、調味料代・交際費・衛生費・修養及び娯楽費・被服及び什器費・保険料・税金の各々に相当するかあるいは賄える金額となっており、内職が些少でも収入の補助をなしている様子がわかる。しかし、こうした経済生活を余儀なくされる直接の原因である、物価変動や不況に関する政治・経済・社会的事情の説明は、一切なされていない。『婦人世界』で家計簿予算記事の選者である嘉悦孝子は、その講評のなかで、

「世界的不景気の中で、日本がどん底の不景気に悩まされていることについては）大体的観察としては貨幣を粗末に使うからであるといえましょう。私共が一銭一厘の微をも慎重に考慮して使いましたならば、我が貨幣の価値はひとりでに高まって

くるものと存じます。こういう風にしまして始めて一家経済の基礎を泰山の安きに置くことが出来。貨幣の価値が高まると共に次第に国家の信用を高めることが出来、国家の一員としての婦人の重大なる仕事が意義あるものとして現れて来るのでございます。

と述べるのである。不景気の構造を知らせるわけではなく、消費支出の抑制に重点を置き、それを「国家の一員としての婦人の仕事」として強調し称える。このような見地に立つて実用派ジャーナリズムは、内職、副業案内記事を不景気対策とした。

家計記事のほかに、育児・家庭医学（民間・素人療法が目立つ）・料理記事が満載されている。大正六年の『主婦之友』の創刊号から年末号までの中から見ると、「赤坊を丈夫に育てる秘訣」

「子供の蟲氣を治した経験」「疫痢も手当が良ければ癒る病氣」「おいしい味噌汁の拵え方」「手軽に出来るジャムのいろいろ」「経済で衛生的で風味のよろしい改良餅の拵え方」などがある。これらの家計、内職案内、育児、料理記事がすでに、大正期の女子教育にみられた特色——家維持のための節儉・貯蓄・家事技術の重視、衛生思想——に合致していることに気づく。こうした理屈抜きの実用性は、「読者人口の底辺に焦点をあわせた実用記事と娯楽記事を提供することを通して、社会的に支配的なモラルを疑わず、おとなしくそれに従う女性を全国規模で作り上げる作用を演じた⁽¹⁸⁾」のであった。

いわば生活離れしていない文化が大衆文化といえる。当時の出版界は、女性や子供も含めた一般大衆を幅広く読者として獲得したことにより、隆盛を見るに至る。そのなかで、婦人雑誌の女性

読者層の拡大は、生活を成立基盤とする大衆文化の一端を担ったといえると同時に、平均的女性像・主婦像もつくり上げていったのである。

3 実話記事と社会への回路

一九一〇年代後半から一九二〇年代において婦人雑誌は飛躍的に発展したが、その過程では、良妻賢母思想が女性への抑圧思想として機能し、家庭観や女性観も変化していった。女性は常に家庭と結びつけられ、一体視されることになる。

このような女性の状況に、社会派ジャーナリズムは、どのような姿勢をみせたのであろうか。一九二〇年の『婦人公論』をみてみよう。

一九二〇（大正九）年は、一月までの戦争景気の絶頂から三月の戦後恐慌の爆發へと、急転落した年であった。こうした衝撃に、社会改造への潮流がさまざまに噴出していった。この時勢の動きに『婦人公論』は、『人間改造号』（春季特別号）（四月号）をもって対応している。「愛を中心にした生活」（吉田絃二郎）「頭の改造・心の改造」（桑木巖翼）「婦人改造の着眼点」（谷本富）「男から見た女の改造」「女から見た男の改造」など評論がある。なかで編集主幹である嶋中雄作は次のように述べた。

「婦人の天職如何も今更らしいが、子供を作るといふ神から恵まれた婦人の職能は、子供を育てるといふことに必然的に結ばれている。子供をいかに育てるかという事はつまり人間改造の要旨である。——中略——子女の養育、教育に於いて、婦人は男子の思いも及ばぬ特権を賦与せられている。これ程の特権と好位

置とを与えられながら、婦人を軽蔑するような男子を作り出したということは、一面今日までの婦人の不甲斐なさを暴露するものであるともいえよう。―中略―婦人の自覚を得しめるだけの改造の必要はここにも生じて来る。」

すなわち、女性価値とされる「母性」や「尽す心」や「愛の力」を前面に押し出すことにより、男性本位につくり上げた社会あるいは文明を批判したのであった。そして嶋中は、その社会が導いた戦争、その後の退廃を打破し文化を再建する旗標として、女性価値を位置付けたのである。

女性の社会的進出、「家」からの解放を一貫したテーマとする『婦人公論』は、女性の価値を「母性」の価値化とおくことよって、実は女性の「性」を価値化し、その立場から「性」を肯定することを根本とした、改造の視点を提案したといえよう。⁽²⁰⁾

社会派ジャーナリズムによる女性解放の提唱は、大正デモクラシーが最盛を迎えた時期と重なる。だが、女性の自立と解放の要求が高まるにもかかわらず、それを阻害する社会的拘束は根強かつたのである。この理想と現実との落差を如実に反映しているのが、実用派ジャーナリズムにある特集記事の構成である。

同じく一九二〇（大正九）年の『主婦之友』から特集をひろってみると、「優良な中学校や女学校へ子供を入学させようとする親御への注意」「リウマチを根治した経験」「婿養子をして成功した経験」「煩悶を解決した実験」「結婚後長い月を経て子宝を得た実験談」などである。提議される問題は家庭内に限定され、多くは読者からの手記、体験談となっている。実話悲劇は誌面に大きくとり上げられ、「零落して裸一貫から一流の旅館となるま

での苦心の物語」「男子のために散々な目に逢って死を決する迄の涙の歴史」「姑のために虐待されたすえ病中に離縁された私の告白」「如何にせば婚家から離縁せよしょう」など、ここに投げ出されているのは、「煩悶」「悪運」「悲痛」「哀れ」と繰り返される言葉が指すように、明治期以来の家族制度の重圧と暗さ、苦境である。

露呈される告白的実話記事とは、近代合理主義的な市民生活とはかけ離れた、前近代的な観念構造を抱え込んだまま、都市へ流入してきた人々の生々しい実態であった。事実として核家族を営みながらも、意識としては故郷の「家」とつながり、先祖とつながり、さらに国家とつながっていたのである。⁽²¹⁾まさに婦人雑誌は、女性の地位や役割を反映している。「大正デモクラシー時代を迎えるには、これらは当然しほり出さねばならぬ中世的『膿』であった。」⁽²²⁾

こうした「家」にまつわる陰湿な問題を扱った実話記事は、実際に『婦人公論』も同様である。先に例とした「人間改造号」には、「現代生活に対する不満」と題した読者の懸賞当選論文の小事集がある。そこには、「俸給衣食者の家庭から」「野良犬のよう」に「何よりも大きい怨み」「姑と名のつく母のために」など、やはり家庭内の問題からの訴えがある。「婦人公論」が課題とした女性解放への提唱に対して、読者である女性たちの現実の世界には、かなえられない不満、そして嘆息があった。

『婦人公論』が看板とする問題の本質を深く追求した良識と、読者である女性たちが吐き出す身の不幸とは、大正期の女性たちが願望とする理想の世界と現実の世界という対立する構図になっ

ていた。

この理想と現実との断絶に架橋する役割を果すが、菊池寛を代表とする通俗小説である。婦人雑誌に連載された通俗長編小説は、「涙もの」として大正末には映画に結びつき芝居化もされていく。読者であり観客でもある女性たちは、目の前で展開される劇中人物の悲劇的狀況に、同情と憐みの優越した心境のなかで涙を流すのである。

家庭内という閉じられた場にある主婦には、誌上の実話記事は私的なコミュニケーションの場として機能した。読者である女性たちは、誌上の不幸な一女性の境遇に自分を投影する。そしてここでの涙は、通俗小説と同じ優越感のもとの涙である。哀話はいくまでも他人事になってしまっているのである。

通俗小説のフィクションや実話の投稿記事への同化は、緩和剤となつて女性たちの怒りや悲しみを中和させてしまう。一種のカタルシスを味わうことは、一時的な問題解決にすぎない。その本質である「家」の解決策にはならないのである。「家」の構成・制度そのものが社会的に改変されるまでは、通俗小説や実話記事での「涙もの」は消えることがないのであった。

問題への突破口を社会へ求める姿は見られない。だが、家庭悲劇をとり上げること自体が現実への充分な批判と見なし得る。家庭生活と真正面に対峙することで、社会への糸口を探り始めていたのである。それは、忍従、献身、貞淑を前面に登場させることにより、まず家庭での自分の立場―主婦の座―を確固たるものとするのであった。女が一個の独立した人格として定位されていない主婦の座に、女の存在理由を求めたのである。

大正デモクラシーが呼びおこした「民衆の時代」とは裏腹な女たちの屈折した心情は、この時代の感性ともいえるのではないだろうか。

4 一九二〇年代末期の婦人雑誌

女性の社会進出あるいは婦人雑誌の隆盛という現象のなかに、明治期とは異なる、婦人問題への社会的関心の高揚を見ることが出来るだろう。民衆を巻き込んだ大正デモクラシーに相応する動きとも考えられる。

大正デモクラシーの到達点として普通選挙法は一九二五（大正一四）年に成立した。しかし、その成立は治安維持法との抱き合わせであり、女性は選挙権を獲得できずに終わったのである。女性の政治的社会的権利の拡張はなされなかったということである。とすれば、大正期は、女性の側からみた場合、はたして「民衆の時代」といえるのであろうか。

さまざまな課題を残しながら、時代は昭和へはいった。一九一〇年代後半から相次いで創刊された婦人雑誌も、十余年を経過していた。読者層も、「『主婦之友』を愛読させて頂くようになりまして、もう十年にもなります」という主婦から、女学校を優等で卒業した褒美に『主婦之友』を「近所の本屋に予約購読」した女性までさまざまとなり、読者にも世代差が生まれ始めていた。これが婦人雑誌にも微妙な変化をうみだす。一九二〇年代後半をみてみよう。

俗にいう付録合戦が激化するの、このころである。『主婦之友』が創刊の翌一九一八年に、「開運独占ひ」という別冊付録を

新年号付録一覧表 (1926—1935年)

年	『主婦之友』	『婦人倶楽部』	『婦人公論』
1926	大正15年版家庭重宝年鑑	美容と礼法	なし
1927	照宮様を抱かせ給ふ東宮妃殿下御尊像▽絵画と料理の一流大家25名の合作カレンダー	処女と妻の新読本	なし
1928	百発百中開運占ひ全集▽和田三造画伯の絵「人形のお部屋」	昭和婦人新文庫	なし
1929	幸運の占ひ法全集▽岡本一平の漫画双六	和食洋食支那食家庭料理	なし
1930	美容と作法の写真画報	縁談と婚礼一式並に結婚生活	モダン美容学
1931	家庭療法全集▽開運占ひ法の秘訣	新案流行編み物▽簡単な西洋料理支那料理	新結婚教科書▽麻雀手ほどき▽大懸賞小説集▽愛読者日記
1932	毎日のお惣菜料理▽一目でわかる礼式作法辞典▽ペン字と毛筆の習子兼用手紙の書き方▽幸運ひとり占ひ▽国宝の大名画「狩野芳崖の慈母観音」	婦人知らねば恥大画帖▽家庭向米客向冬のお料理▽毛糸編物実物大型紙(第一輯)▽同(第二輯)▽各種小物裁縫実物大紙型▽鑄木清方画伯の額絵「春の夜の怨」	婦人必修モダン語辞典▽全国新時代女性総覧▽迷信と占ひの全集▽「日本女性の歌」(北原白秋詩・山田耕作曲)
1933	お惣菜料理法▽和服洋服裁縫新案物の仕立方百種▽花鳥山水美人画の短冊30枚	花嫁花婿心要帖▽婦人実用習字帖▽美人花鳥山水色紙12ヵ月▽人相手相開運独り占ひ	読んで面白い名曲物語▽婦人の運命と月経
1934	明治天皇御尊像▽皇室の御繁栄▽伊勢神宮▽明治神宮▽宮城二重橋(以上額用写真)▽東郷元帥の書▽乃木大将の書▽竹内晒鳳画伯の絵「富士の雪景」▽国宝地蔵御尊像▽浮世絵美人画▽伊東深水面画伯美人画▽山川秀峰画伯美人画▽童話絵本▽姓名でわかる運命判断▽家庭作法宝典	ペン毛筆習字用婦人手紙辞典▽東京大阪評判料理の作り方▽一流画伯大傑作名画色紙12ヵ月▽漫画絵本「凸凹黒兵衛」	女性運命判断と占ひ集▽家庭遊戯全集▽生理「女の一生」
1935	奥様百科宝典▽吉屋信子著「ペン字の手紙」▽鑄木清方・伊東深水・山川秀峰画伯の美人画▽神占カード▽皇族御写真画報	防寒編物と新手工芸▽婦人かな書上達手本▽母の種本「子供を良くする急所」▽諸流お正月の生花▽漫画絵本「凸凹黒兵衛」	女性文章読本▽神占オラキラム

『大阪朝日新聞』『大阪毎日新聞』の広告により作製。(岡崎男『婦人雑誌ジャーナリズム—女性解放の歴史とともに』現代ジャーナリズム出版社, 1981年, 126頁。)

出したのがその始まりである。一九二〇年に創刊された大日本雄弁会講談社の『婦人倶楽部』は、実用派ジャーナリズムの付録合戦のなから成長してきた雑誌ともいえる。

実用派ジャーナリズムの付録合戦に、一九三〇年からは『婦人公論』も参加している（別表参照）。『婦人公論』の編集主幹は『婦人世界』の前編集長に交代していた。内容も、家庭問題とともに、恋愛と結婚、性の問題を前面に押し出したもの（今日の『婦人公論』の原型）となった。付録は読者の教養を深めようとする意図がうかがえる点で、実用派ジャーナリズムの付録とは異なるといえるが、創刊当初の『婦人公論』から比較すれば、やはり大きな変化といえるだろう。大衆化を示す一例とも考えられる。これらの付録は、実際、読者には大評判となった。私は当時の婦人雑誌の読者であった老女たちに尋ねてみた。彼女らは婦人雑誌といえば、まず付録のなかからの型紙を思い浮かべる、と答える人が多かった。読者の関心は、本誌の内容より付録の内容にあったのだから。

しかし、付録が多いということは、本誌の内容を貧しくすることにもつながる。それでも、「付録は人間的な温さとか色合いとかがつけ加えられた気がして」⁽²⁴⁾、読者のこの錯覚が発行部数の増加に貢献するのである。

付録とならんで読者拡大の引力となったのは広告である。婦人雑誌には、美顔薬、銀行、おしめ、ミルクチョコレート、醬油、ぶどう酒、増毛薬など、生活全般にわたる商品が掲載されている。『主婦之友』の一九二七（昭和二）年五月号を開くと、目次からトップ記事（夫婦喧嘩の防止法）までの八〇頁中、口絵、グラ

ビア、家庭手芸品の誌上展覧会をさきみながら、広告は五〇頁（自社広告含む）も占めている。同号は三一八頁で作られており、一誌全体に占める広告頁の割合は、かなり高い数字にのぼる。

広告は、出版社と企業との相乗行為である。付録・広告からみると、女性読者がいかに「消費」部分に貢献させられているかが明白になってくる。大衆文化の普及過程に組み込まれていた女性読者たちは、実は、消費者としても組み込まれていたのだった。やがて来る大量消費社会において、女性は市場戦略の主要なターゲットとして浮上してくるだろう。

一九二〇年代の不況は長びき、世界大恐慌は、好景気への回復の望みを全く絶ちきるものであった。常に不況のもとで家計を管理する主婦たちは、内職との縁は切れなかった。実用派ジャーナリズムもまた、内職・副業の案内は継続していたが、創刊当初と一九二〇年代後半とでは、その内容を変えている。かつては「守りの片手間に出来る」内職であり、高収入も期待されていなかった。しかし、一九二七（昭和二）年の『主婦之友』をみると、「小資本で出来る女の商売十種」（一月号からほぼ一年間連載）から始まり、「小鳥飼いに成功した婦人の経験」「婦人・子供の手でも短期に収益のある家鴨の飼ひ方」、一九二八（昭和三）年には、「新副業・食用鴨の時代来る」「ビール箱で簡単に出来る西洋松茸の素人栽培法」「食物屋商店に成功した婦人の経験」などがある。

確かに職場は家庭の範囲内ではあるが、もはや容易に片手間にはできない。一種の商売とも呼べる家庭副業は、主婦に対して高収入を要求している家計の経済的苦境という実情があり、それほ

どまで不況は日々深刻さを増していたのである。寸暇を盗んで副業に努める役割をも、主婦に要請しはじめていた。その背景には、産業化への打開策に喘ぐ日本社会があった。

徐々に無気味な足音が近づきつつあるなかで、婦人雑誌統制の動きが始まった。一九二八（昭和三）年七月、「婦人雑誌取締請願」が提出された。露骨な性愛記事、刺激的な大新聞での広告などに對する、女性識者の批難・抗議である。婦人雑誌の俗悪低級化は、大衆文化、果ては女性自身の墮落にもつながるとして、婦人雑誌界に苦言を呈したと思われる。しかし、婦人雑誌ジャーナリズムによる性愛記事の編集は、やがてくる言論統制への抵抗であつたとみることもできないわけではない。

こうした外部からの批判に應えるかのように、婦人雑誌々上に翔んでる女性の批判の記事が載る。たとえば、一九二九（昭和四）年の『主婦之友』九月号において、「家庭の叛逆者松永秋子夫人」という記事がある。医学博士夫人が夫と子供を捨てて愛人のもとへ去つたという事件に関して、各界から二〇人の意見を載せたものである。多くは常識的道德観から夫人を批判したものであつたなかで、正しい経済観念を身につけることで、道德的過失は避けられるとするコメントがあつた。そのなかに次のような文がある。

『主婦之友』のような有力な婦人雑誌がお米の上手な買い方やなんかのような、台所経済ばかりでなく、広く国家経済の動きをまで教育してくれるようになれば、裨益するところが少くないであらう。』

（明治神宮々司、陸軍大将、一戸兵衛）

他のコメントで目をひくのは、「女大学は滅びて」「婦女庭訓は廃れ」という言葉である。従来の女大学的な女性の立場とは大きく異なつて、主婦、女性をめぐる時代は変わったらしい。一九二九年の『主婦之友』に、「夫婦喧嘩史観」と題した小話がある。

「夫婦喧嘩に於ける、細君側の戦略は、明治以後、大たい次の如く変わった。

△明治時代 何を言われても、ただめそめそと泣いて良人を手古摺らせた。

△大正時代 『では、私、出て行きますわ。』を唯一の武器として、良人を囚ました。

△昭和時代 『私、どんなことがあつても決して、あなたの側から離れませんわ。』と言つて、良人の心胆を寒からしめる。」
こうした小話に笑うゆとりを持ちだすぐらいに、主婦は家庭における一定した座を確立したわけである。それは、金銭には代え難い無償の献身、あるいは自己犠牲に価値を見出す、伝統的家庭観の完成でもあつた。

だが主婦としての存在は、家制度を支えるばかりではない。主婦として強固な立場を保つことは、その受ける抑圧の大きさゆえに、社会的に攻撃力を持ちうるということであつた。

しかしながら、女たちの積極的な力・姿勢は、やがてきたファシズム期には、国防婦人会を中心として、女たちが互いに監視し合う悲惨にかわる。女たちによる戦争への加担は、女性の歩みにとつて、まことに不幸なことであつたといわなければならぬ。

むすび

注

人間といえは男性を指した時代、婦人雑誌は、性差を意識的に活用した雑誌であった。婦人雑誌という新しいジャンルが、雑誌界に登場し発展したのである。

本稿では、近代日本の女性を婦人雑誌の分野にせよめて考察した。活字が所狭しと満載された当時の婦人雑誌からは、雑誌が手元に届く時を心待ちにする、大正、昭和初期の女性たちの姿や生活が、浮かび上がってくるのであった。そこで語られることは、「家」の束縛、種々の悩み、苦しみである。これらの問題の本質に対する批判の視点に貫かれた婦人雑誌は、主流にはならなかった。有力誌とはなっても、展開される処方箋は、一般の女性たちにとってはあまりに観念的すぎた。しかし、その状況のなかからも、女性たちは少しずつ姿を変えていったことが、認められるだろう。市井の女たちは、屈折や挫折を覚悟し、自分の意識の高まりを大切に育てていくことを決心したのである。

現代に目を向けてみよう。参政権、財産権、教育における男女平等、雇用機会の男女均等などの諸権利が、女性にもたらされた。女性の社会的権利の拡張はなされたのである。一九二〇年代と女性たちと現代の女性たちとは、確かに社会的状況は、大きく変化した。だが内面的には不安定で、さまざまに問題は提出されている。性役割・主婦をめぐる状況・家庭のあり方など、新たな検討がすでに始まっている。

(なお当時の雑誌からの引用文については、旧仮名づかいはすべて現代仮名づかに直した。)

(1) 平塚らいてう『元始、女性は太陽であった——平塚らいてう自伝』(大月書店、一九七一年)上、三三九頁。

(2) 井上輝子「女性ジャーナリズム論」(『新聞学評論』第三四号、一九八五年)五一頁。

(3) 近代女性史研究会『わたたちの近代』(柏書房、一九七八年)八頁。

(4) 『中央公論社の八十年』(中央公論社、一九六五年)一五五頁。

(5) 出版史研究会『総合雑誌百年史』(『流動』七月号、一九七七年)一三二頁。

(6) 深谷昌志『増補版 良妻賢母主義の教育』(黎明書房、一九八一年)一六五頁。

(7) 永原和子「良妻賢母主義教育における『家』と職業」女性史総合研究会『日本女性史、四巻近代』(東京大学出版会、一九八二年)、一五〇頁。

(8) 本稿では触れていないが、近代日本女性史には一方では、稀にみる劣悪な環境・待遇のもとで職業にかざるを得なかった女たちがあった。しかもそれは、女性の有業者の絶対数を占めていた事実を忘れてはならない。

(9) 中鳥 邦「大正期の女子教育」日本女子大学女子教育研究所『大正の女子教育』(国土社、一九七五年)一三頁。

(10) 村上信彦「婦人問題と婦人解放運動」(『岩波講座 日本歴史一八・近代五』岩波書店、一九七五年)二三九頁。

- (11) ひろたまさき「文明開花と女性解放論」女性史総合研究会、前掲『日本女性史、四卷近代』参照。
- (12) 石川武美『わが愛する事業』（主婦之友社、一九四四年）五頁。
- (13) 同右、三二頁。
- (14) 橋本哲也「都市化と民衆運動」〔岩波講座、日本歴史一七 Ⅱ近代Ⅳ〕一九七六年）三二二頁。
- (15) 落合恵美子「近代家族」の誕生と終焉―歴史社会学の眼〔現代思想〕第一三卷、一九八五年、六月号）七四―七五頁。
- (16) 沢山美果子「近代日本における『母性』の強調とその意味―人間文化研究会『女性と文化―社会・母性・歴史』（白馬出版、一九七九年）一七六頁。
- (17) 矢木公子「家庭性の崇拜―産業化の生みだした女の神話」〔女性学年報〕第二号、一九八一年）六五―六六頁。
- (18) 城戸又一『講座現代ジャーナリズムⅠ歴史』（時事通信社、一九七五年）一〇五頁。
- (19) 一九二〇年、平塚らいてう、市川房枝、奥むめお等の首唱で、新婦人協会が発足した。
- (20) 染谷ひろみ『婦人公論』の思想―形成期における「近代女性史研究会、前掲、『女たちの近代』、参照。
- (21) 井上輝子『女性学とその周辺』（勁草書房、一九八〇年）参照。
- (22) 井手文子『主婦之友』―大正期の婦人雑誌その一〔文学〕第二六卷、一九五八年、八月号）一四五頁。
- (23) 前田 愛「大正後期通俗小説の展開―婦人雑誌の読者層」

〔文学〕第三六卷、一九六八年、六一七月号）参照。『近代読者の成立』（有精堂、一九七三年）所収。

- (24) 鶴見俊輔『限界芸術』（講談社、講談社学術文庫 一九七六年）一六四頁。

(25) 一九二八年四月、婦人矯風会三七回大会において「現代婦人雑誌改善要求の件」を議題としたことを始めとし、職業婦人社、続いて五月には婦人問題研究所・月曜クラブなども問題にとり上げた。婦人雑誌改善委員（守屋東、ガンドレット恒子、市川房枝、千本木道子、金子茂ら）をあげて全国婦人団体に檄文を配布する一方、同年七月十九日には、内務省に取締方請願を提出し、運動を進めた。

〔本稿は一九八五年度卒業論文として提出した『近代日本の婦人文化状況試論』を本誌のために書き直したものである〕

指導教員からのコメント

大江 一道

私の八四・八五年度の演習は一九、二〇世紀の都市と文化を探究してみることであった。笹本さんは日頃の女性問題へのつよい関心をこの演習とつなげて、本稿のような卒業論文を作成した。この論文は、わが国において新中間層、大衆文化の形成期にあたる第一次世界大戦後の、一九二〇年代の都市文化の一端を担った婦人雑誌を資料として、これまであまり顧みられない主婦層に視点をあて、女性の位置に照明をあてたユニークな、オリジナルな研究である。かつての読者である老婦人たちからの聞き取り調査も傍証となっている。女性にとって一九二〇年代は単なる過去であるか、改めて考えさせてくれよう。